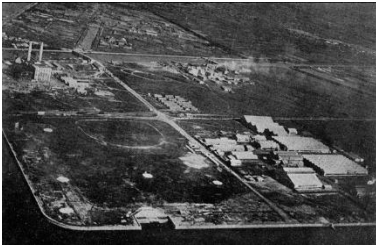


弥生日和

～弥生の日常風景～

【人権平和学習がありました】

10月2日(木)に人権平和学習があり、映画「いのちありて」を鑑賞しました。
この映画は飯島町在住の映画監督、後藤俊夫さんが撮りました。後藤さんは、伊那谷の自然や伝統文化を題材に映画を撮り続けています。



「いのちありて」は、伊那弥生ヶ丘高校の前身、伊那高等女学校の名古屋への勤労働員を題材にしたドキュメンタリー映画で、証言を交えながら戦争に翻弄され激動の時代を生き抜いた女学生の青春や当時の教師たちの苦悩を描いた作品です。後藤監督は、「人の命の大切さや先人たちの声なき声を訴えた作品。今も平和の裏側には、いろいろな危険が押し寄せている。戦争を二度と繰り返さないためには、歴史を振り返って学ぶことが大切」と話しています。(伊那谷ねっと 2011.11.25 より)

今も、連日、イスラエルのガザ地区侵攻、ロシアのウクライナへの侵攻の報道がされています。そこで多くの罪なき民間人が被害に遭っています。私たち日本はまだそのような状況にはなっていませんが、自分事として考えていかないといけないと改めて思いました。最後に、本校内に建つ、飯島米子さんの鎮魂碑文を紹介します。

伊那高等女学校 学徒勤労働員の記録

太平洋戦争末期の昭和19年8月1日、飯島米子さんを含む長野県立伊那高等女学校4年生、270名は、「閣議決定に基づく学徒動員実施要綱」により、軍需工場への出動命令を受け、三菱重工業名古屋航空機製作所へ動員された。

12月には東南海地震に見舞われ、相次ぐ余震と、その頃より激しくなった米軍の空爆により、常に死と向かい合う日々であった。

折しも、昭和20年3月13日、米軍機の空爆は作業中であった学徒のうち、16歳の飯島さんの命を奪ってしまったのである。飯島さんの死を契機に、私たちは故郷に戻ることができた。

生き残った私たちは、この事実を決して忘れることはない。戦争によって学徒が、学問する権利を奪われ、死んでいった悲しみを再び繰り返すことの無いよう後世に伝えたい。